**会長月信　September2020（2020.09.14）**

本年度は、所信表明でもお伝えしたように「今までと同じことができない」年度です。

時代の要請、状況の変化などもあり、私たち自身が「選んでいく」ことが必要になっていると思います。

皆さんの意向を聞きながら、いま会長として何を考えているのかを、共有する機会が必要と思い、今回、月信を発行することといたしました。

2020年に還暦を迎える身として、正直未熟でとても恥ずかしいのですが、私自身、壁にぶつかり、ころんだり、皆さんにご迷惑をかけながらこの一年を歩むということになると思っています。会長職というなかで、出会う様々なことを皆さんと共有しながら、進んでいきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

**「４つのテスト」**

ロータリーの言動の骨幹にあるのが、この４つの意識だと思っています。

「真実かどうか」「みんなに公平か」「好意と友情を深めるか」「みんなのためになるかどうか」

　自身、最近、「真実かどうか」について深く考える機会がありました。ただ、真実がひとつであるかは限らないので、それぞれの真実に照らして考えるべきことなのかとも思っています。

　もうひとつ、皆さんと共有したいのが「みんなに公平か」ということです。これは、英語でいうことのFairであるか、どうかということです。公平、ということは、平等ということとは異なる概念です。フェアネスというのは、私が数年くらしたアメリカでは、非常に重要な概念でした。ほとんど、全てのことが、この概念と向き合うといってもいいものでした。

しかし、これは、日本人である私にはニュアンスの理解に時間のかかるものであったと思います。日本人的な同質性を基盤にすると、どうしても「平等」と「公平」が同じような概念となることが多かったのです。しかし、平等と公平は違います。平等とは、個々の状況（資質、能力、努力などなど）に関係なく一律に遇するシステム。公平とは、違いを加味したなかでの「偏り」なく遇すことだと理解しています。

　新しいボランティア活動をおこなうなかで、この「公平性」について、疑問を口にされる方もいらっしゃると聞きました。平等性の概念とフェアの違いかもしれないなとおもっています。私自身は、世の中に対してフェアに立ち向かうということが、ロータリアンとしての在り様だと思っています。そして、そのことが好意と友情を深めて、関係するみなのためになることを願っています。

not equal so fair

　　　　　　　　　　　　　　東京中央新ロータリークラブ　会長　清宮　普美代